「小学校区教育協議会－はぐくみネット－」事業・学校元気アップ地域本部事業
合同実践報告会

大阪市では小学校区における「小学校区教育協議会－はぐくみネット－」事業のほか、中学校区においても学校・家庭・地域の組織的な連携のもと、地域社会全体で子どもたちを育てる「学校元気アップ地域本部事業」を実施しています。両事業の推進に向け、事業関係者及び事業に関心のある方が、事例などを通して両事業の成果と課題を共有し、教育コミュニティづくりと学校教育支援活動についてともに考え、交流する機会として合同実践報告会を開催しています。

日　時：令和６年１月 31 日（水）14：00～16：30
会　場：大阪市立総合生涯学習センター　第１研修室
テーマ：「地域と学校との連携」
内　容：基調講演／大阪教育大学地域連携・教育推進センター特任教授　　池上　英明
事例報告／神津小学校区はぐくみネット（淀川区）
／白鷺中学校区学校元気アップ地域本部（東住吉区）
意見交流会

【基調講演】
「地域と学校がつながるために」と題して、大阪教育大学地域連携・教育推進センター特任教授の池上　英明先生にこれからの地域と学校の協働の在り方についてご講演いただきました。
（以下講演より抜粋）

〇つながりでピンチを乗り越える
・兵庫県のトライやるウィーク（正式名称「地域に学ぶ中学生」体験活動週間）
阪神淡路大震災や児童にかかわる事件などで、心を痛めた地域の人や子どもたちの心を癒し、前を向けるようにと始まった試みの一つ。職業体験や様々な体験・地域連携の体験もあった。
・子どもの安全見守り活動
学校で起こった事件をきっかけに、平成 17 年４月に府内の小学校に警備員が配置され、警察 OB による安全見守り隊が全小学校区で始まった。すでに各地で独自の見守り活動はあったと思うが、府内全部に広がった。
・コロナ禍
2020 年２月に一斉の臨時休校が始まった頃、当時の勤務校の PTA 会長の「今みんなが不安であるが、手洗いやうがいなどできることをして、家族や子どもたちを守る。みんなでがんばろう。」というメッセージや、校区の地域教育協議会会長の「デマや不正確な情報に流されて、トイレットペーパーを買い込んだり、マスクをしていない人を批判したり、差別したり傷つけたりすることが起こっている。コロナウイルスで体だけでなく心も病んでいる。今自分が何をしなくてはいけないか、何をしてはいけないか、じっくり考えてほしい。今経験していることを忘れず記憶してほしい。」というメッセージが寄せられ、学校ホームページで紹介した。こうしたメッセージに児童会の子どもたちが「再会できるまでがんばろう」と反応し、６月の登校再開時には児童会の子どもた

ちが「一緒に歩んでいこう、布忍小学校児童会　コロナに負けるな」と書いた大きな紙を貼って、登校してきた児童を迎えた。また卒業生が、学校付近やお世話になっている病院に激励のメッセージカードを届けたり、消毒作業で PTA が協力したりなど、コロナというピンチをつながりで乗り越えた。

〇学校・家庭・地域が連携した様々な活動

大阪府地域教育振興課のホームページ「特色ある『教育コミュニティづくり』の取組」より

・四条畷中学校の「図書室かあさん」の取組　　テスト前勉強会

・大阪元気広場通信　　・柏原市国府小学校　防災合宿　　・親学習　桜塚高校

・松原市の中学校での取組

ユニクロ（ファーストリテイリング社）が主催したプロジェクトで、中学校 2 年生と地域が家にある古着を集めて、使えるものを様々な国に届けた。3 回の回収で段ボール箱 43 箱、5,054 着を集めた。

・新 1 年生の支援としてのエプロン先生

・府立松原高等学校が運営する子ども食堂「まつこうキッチン」

〇欠かせない学校・家庭・地域の連携

学習指導要領にいう「社会に開かれた教育課程」では、学校の教育活動は学校だけでは完結せず、学習活動の展開に地域の力を得ることを示している。協働エージェンシーやウェルビーイングなどが OECD の中で言われているが、協働エージェンシーとは、変革を起こすための目標を立てて、振り返り活動を行いながら責任ある行動をとること。与えられることではなくて、自ら枠組みを作っていく。働きかけられるのを待つのではなく、主体的に学ぶ。これを進めるには、保護者やコミュニティと双方向のやり取りが必要で、ともに活動することがエージェンシーを育てることにつながる。

ウェルビーイングは福祉・福利・幸福と訳され、国の教育振興基本計画でも使われている。ウェルベアという似た言葉には生活の最低保障や弱者を守るという意味合いがある。ウェルビーイングは、当事者の権利擁護と自己実現という理念をバックグラウンドに持つ概念で、様々な困難に陥った人が無力感や孤立感を乗り越えて、支援を受けながら生活課題の解決に取組み、幸せに暮らす状況を作っていくこと。教育振興基本計画の中にもこの言葉が使われている。子どもたちが自分の置かれている困難な状況の中で、待っているのではなく、様々な力を得ながら乗り越える力を育てていくこととしている。こうした 3 つの言葉からも、学校・家庭・地域の連携が理念的にも求められているということがわかる。

以前は開かれた学校づくりとして、学校の敷居を低くして、地域の人が来やすい学校にすることが求められた。今は地域とともにある学校、地域に信頼される学校というのが欠かせないテーマである。学校だけで子どもたちを育てることはできない。学校・家庭・地域が連携して、社会総がかりで育てる。コミュニティスクールの設置が議論され努力義務となっている。ユニセフでもウェルビーイングの 6 つの指標が取り上げられている。

以上、池上先生の経験された具体例を交えながら、学校・家庭・地域連携の目指すところについてわかりやすくお話しいただきました。

【事例報告】学校元気アップ地域本部

東住吉区白鷺中学校区学校元気アップ事業地域本部から「ツナグ～学校・地域・家庭～」と題して、各種の活動の様子について発表がありました。

白鷺中学校の学校元気アップ事業は平成 24 年度に立ち上げ、学校関係者と学校元気アップ地域コーディネーター、地域の方、PTA で運営委員会をつくり、支援事業の選択や事業内容などを検討してスタートした。放課後の図書室開館・放課後学習会・校内緑化が活動の三本柱である。

各事業の紹介

〇広報誌活動

元気アップの事業と分かるよう「つなぐ」というテーマを変わらず続けている。

〇学習支援活動

学力向上を目的に放課後学習会で英語・数学の基礎基本を押さえる。最初は中間・期末テスト前に指名された生徒を対象に実施した。個別指導が必要な生徒が多く、ボランティアの手が足りないなどの課題があった。平成 24 年度からの放課後学習会からは生徒が自主的に参加申込書を提出している。これとは別に生徒からの要望でテスト前勉強の会場も開設した。コロナ禍で中断した取組もあるが、令和 3 年度より学力支援サポーターや教育実習生の協力でテスト前勉強会を再開できた。ボランティアの増員も含めて継続していきたい。

〇図書室開放

ボランティアの協力で開室できた。コロナ禍で中止したが、来年度から再開できる。

〇不登校支援事業（ワンステップ）

学校から不登校生への支援に取り組んでもらえないかという依頼があり実施した。「学校へ登校できるための第一歩」という意味の「ワンステップ」という活動名は教頭先生の発案で、登校してくる場所は相談室として、令和 2 年度から始めた。初めは活動に対する教職員の理解に差があることや、対象生徒の来室状況が定まらない等の課題があったが、「単なる居心地の良いだけの居場所ではなく、教室へ戻ることを目標として、担任や学年の先生・教科担当などの先生に関わってもらう」という方針を立てて支援した。令和 4 年度には対象生徒が自身の進路と向き合い、全員が高校進学を果たした。

今年度も各学年に対象生徒がいるが、１週間に１日１時間の来室からスタートして、回数や時間が増えてきている。この事業は生徒とサポーターの信頼関係で成り立っている。学習はタブレットで原学級とオンラインでつながり授業を受けることができるが、休んでいる間に授業が進んで理解できなかったり、様々な学年の生徒が一緒にいる部屋なのでやりにくかったりという課題があり、各自の学力にあったプリントなどで対応している。コミュニケーションを深める手段として百人一首などのゲームや季節の飾り物の作成、図書室での読書、スポーツ活動などを取り入れている。サポーターが記入する活動日誌を担任も見て情報共有をしている。生徒本人が記入する活動日誌は担任に提出し、コメントをもらっている。試行錯誤しながら学習環境を整え、学年や学級と距離が広がらないように情報共有をしながら活動し、学年集会への参加も少しずつできるようになった。学

校と地域の連携のもとに成り立っている事業として、教科学習にとどまらない色々な学びの場になってほしいと考えている。

〇校内緑化事業

・学校花壇の花の栽培・手入れ、元気アップ畑での活動、散水ボランティア

・一輪挿し運動

校内で育てた花を一輪挿しの花瓶で校内廊下に飾る。生徒も落ち着いた行動をとるようになった。ボランティアによる花の活け替えは休み時間で、校内に地域の大人の目が入る。挨拶など地域の人との交流が生まれることが目標である。

〇地域交流事業

・育和小学校と連携　　サマーキャンプの中学生リーダー　育和踊り（河内音頭）

・学校の防災学習と連携　　防災アクティブラーニングチーム　防災マニュアル作成など

避難所運営ゲーム　令和５年度防災未来賞・防災甲子園優秀賞を受賞

〇学校アンケートの生徒の回答で、「人の役に立ちたい」は 99％が肯定的回答だった。

学校や生徒のニーズを反映した取組や学校との信頼関係がうかがえる事例で、学校と地域の連携や支援体制の重要性を改めて認識する報告でした。

【事例報告】小学校区教育協議会―はぐくみネット―

東淀川区の神津小学校区はぐくみネットから、「絵本のくに～小学校での本の読み語り～」と題して、長年取組まれた絵本の読み語りの活動について発表がありました。

活動の経緯

平成 13 年に「読み語り活動」の実施を学校に申し入れて始めたが、翌年に学校から、毎週水曜日の朝 8:30～8:50 に 1 ～ 3 年生の 9 学級に担当者が入って読み語りをしてほしいという要請があり、なんとか人数を確保して実施できた。平成 16 年からは 6 年生までの全 17 学級で実施している。予備 1 名も含めて 18 人を確保する苦労はあるが、今年で 22 年目になった。

活動内容

〇読み語り

各学級での読み語りをした後に必ず反省会を実施して、どういう本を読んだか、困ったことなどの情報交換をしている。平成 15 年から読んだ本の一覧表を Excel で作成し、どの学年で、だれが、いつ、何を読んだかを記録している。選書での重複が避けられ、卒業までにどのくらいの読み語りを聞いたかがわかる。通常は 6 年間で 400 冊余りになる。

〇お話会

入学式後に新入生の学級でお話会をし、新しいボランティアの募集にも役立っている。夏休み前には戦争をテーマとしたお話会で、低・中・高学年別で、多目的室で 45 分間実施する。読書週間や 3 学期の 6 年生を送る会などでも実施する。送る会では読み手メンバーの 6 年生の保護者が中心となって本を選んでいる。

〇子どもの本の講演会

秋に絵本作家や児童図書の出版社の方を招いて、低学年・高学年・PTA に分かれて講演していただく。きっかけは 2007 年にはぐくみネット活動のモデル校になったことで、絵本作家のかわばたまこと氏を招聘した。それ以来毎年作家や出版社の方をお呼びしている。講演を聞いた子どもたちは「絵本作家になりたい」などの感想を書いてくれる。

〇放課後いきいき活動との連携

いきいき活動からの要請がある時には読み聞かせをしている。

学校の対応・協力、地域の理解

学校は大変協力的で、お話会に校長先生や担任の先生が出演してくださり、子ども達の評判も上々である。保護者から「学校で読んでもらった話を家でしてくれた」「読んでもらった本が気に入ったから買ってほしい、と言っている」など子どもたちの様子が伝えられた。今年度の学校協議会で、全国学力・学習状況調査の報告があり、「読書は好きですか」の項目で全国平均は 39.4%、大阪市は 40.3%、神津小学校の児童は 47.1%で、毎週「絵本のくに」で本に触れている成果と言われた。

地域活動などでの予算の余剰金で本を購入し、絵本のくに文庫として学校図書室に置いている。学校が購入する図書との重複を避け、講演会で紹介された本や話題の本を吟味して選ぶ。漫画ノベライズ本も、絵本から文字だけの本に移行するきっかけになるとして選んでいる。

コロナ禍での活動

活動許可が出ても 6 年生を送る会がその年はできず、次の年も対面ではできなかったので、出演者は Zoom で練習して録画した DVD を各教室で視聴してもらった。DVD にするには著作権が課題となるが、クリアできる図書（ほるぷ出版「希望 心開くとき」）を探して作成した。

淀川区　読み語り交流会

淀川区は、区内小学校それぞれに読み語りグループがあり、交流会を淀川区役所で開催している。大阪府立住之江支援学校との交流、神津地区高齢者食事会や新北野中学校での読み語り会などがあるが、コロナ禍で中断したままのものもある。

ボランティアとしての思い

数年前に美容室に行ったときに新しい美容師さんから「絵本の会の方ですね？」と声をかけられ、「毎週水曜がすごく楽しみだったんです。」と言われた。子どもたちの笑顔を糧に、子ども達の心をこれからも耕せるボランティアとして活動したい。

長年にわたる読書推進活動の実践事例で、区全体で連携している様子もうかがえる報告でした。

【意見交流会】

Q：学校元気アップの報告にあった不登校支援で、教室に戻ることを目標にしているということであるが、その対応の判断基準はどうしておられるか。

A：現在支援している生徒は教室には戻れない状況で、ワンステップの部屋で 1 日を過ごす。体育科や担任の先生と授業予定を確認して、小体育館で運動できる日時等のスケジュールを 1 週間前に立

てる。事前に伝えているとその日に登校してくれる。対応の判断については担任や学年主任の先生と相談している。日によって生徒の調子も変わり、授業や学習活動の進まない時もあり、考慮した過ごし方を取り入れている。

Q：サポーターの人数は限られていると思うが、どのように入っておられるのか。

A：毎日参加してくれる方が１名、大学生が数名学力サポーターとして週に１～２回。

Q：池上先生への質問。不登校生が自己肯定感を持つことが大事だが、ウェルビーイングは難しい。積極的に自分にできることを見つけていく、ということだが、不登校生と関わっていて、エンパワーメントの必要性を感じるが、先生たちはとにかく教室に入れることが目標になっている。ウェルビーイングにつなぐ、エンパワーメントの段階を取り入れられないか？

A（池上先生）：学級集団作りの取組や人権学習の中で、学級の子どもたちと地域の方をどうつなげるか、保護者がどう関わるかが要点。不登校生が抱えている悩みや困り感を担任がしっかり受け止める。年齢の近い大学生やメンター、同じような経験をしている先輩などがそばにいることで、子どもたちの悩みなどが出てくることもある。その思いなどを学校に返し、学校もその生徒が戻ってこられるように環境を作る、という風につなげることが大事。

A（白鷺中学校長）：（報告の補足）教育実習やインターンでつながりができた学生に声掛けして協力してもらっている。担任や学年・担当者だけでなく、SKIP という校内の情報共有ネットの「いいとこ見つけ」というコーナーに入力することで、他の教職員も見ることができる。

A（神津発表者）自己肯定感については、小学校でも大事にしている。いじめとかの問題はあるが、そこに触れる時に私が紹介するのが、長谷川義史作「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」という絵本で先祖をずっとたどってサルまでいく。相田みつをの詩「自分の番いのちのバトン」でも 20 代前までさかのぼり、100 万人を超す人が自分につながっていると書かれている。人同士が出会う奇跡、命がつながっていてここにいる、絶対に人を害してはいけない、自分を害してもいけない、と話すと子どもたちも理解してくれる。それが自己肯定感になるかどうかはわからないが、高学年の児童は理解できている。

【参加された方々の感想】（アンケートより一部抜粋）

・池上先生の講演はわかりやすかった。子どもの健全な育成には、地域と学校・家庭の連携が必要だと感じた。やっていない取組がたくさんあった。

・地域学校協働活動というウェルビーイングの話が、現代にそぐう視点だと感じた。

・学力向上や不登校対策などは小学校でも活用できないかと思った。

・他校ではどのようなことをしているのか、具体的に分かった。資料も豊富でよかった。

・学生も取り入れて、いろんな取組ができることが分かった。

・どの事例も学校と深く連携していることが分かった。今まで以上に学校と連絡をとりあいたい。

・どちらも学校が協力的でうらやましい。このような会を学校サイドも交えて行ってほしい。

・校長先生の支援・協力が絶対必要だと思った。先生方に活動を知られていないと感じている。

・それぞれの学校の体制により、取り組める・取り組めない、があるのだと知れた。

・無償ボランティアが難しくなってきた。同じ課題があると分かった。

短時間の意見交流会でしたが、不登校に関する質問では内容の濃い質疑応答がありました。またアンケートでも、不登校支援や学校との連携に関する内容の回答が多くありました。